

色彩に富み、刺激的な飾り付け…、陽気な音楽があふれ、活力がみなぎる車内…。ナイロビのマタトゥは唯一無二の個性を心ゆくま

で表現し、日々、進化を遂げている。人びとの注目を集め、毎日の暮らしを支えながら、今日もありっただけの力で街なかを馳せてゆく。

---

## アジア人学生と若手研究者のための 「京滋フィールドスクール 2017」の概要と意義

倉 島 孝 行 \*

### はじめに

2017年11月上旬、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）と東南アジア地域研究研究所（CSEAS）は、京滋地方を研修先としたフィールドスクール・プログラムを実施した。参加者はブータン、ミャンマー、ラオスの5大学に属する大学生、大学院生、若手教員・コンサルタントら31名で、<sup>1)</sup>このうち、特に22名をASAFASへの短期交流学生としても受け入れた。彼/彼女らの専攻は、多様な学部・学科生が混在したブータンを除き、農林学系からなった。また、本学側のプログラムの企画・運営は竹田教授、安藤准教授（当時）、赤松連携助教、報告者が担当した。このほか、河野 CSEAS 所長（当時）と太田 ASAFAS 研究科長（当時）が懇親会とワークショップでそれぞれ本学を代表して式辞を述べられ、附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センターが研修生

の各レポートを編集し、ASAFASの成果報告集『創発』から刊行する業務を担った。

以下ではこうしたプログラムの概要と研修生が提出したレポートに対する報告者の所感を紹介したうえで、プログラムの中で報告者が目にしたある出来事と、それをもとに小考した点について簡単に述べてみたい。それらはある研修生らがとった地域の現実とズレた行動と、本プログラムがそのようなズレの自覚・修正を彼/彼女らに促すきっかけとなり得たかもしれないという点である。

### プログラムの特徴・目的・内容

ASAFASに属するにせよ、CSEASに属するにせよ通常、両組織の教員・学生らは、こちらから各国調査地に出向き、それぞれの現実や動態を調査することを主とするが、本プログラムの特徴は各調査国の学生や若手研究者を本邦に招き、我が国の現実の見聞、地域

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 31名の国別内訳はブータン10名、ラオス6名、ミャンマー15名であった。

表 1 京滋フィールドスクール 2017 の最終プログラム

日程 / 活動地	午前 / 午後	活動内容
11/1 大阪府		参加者来日.
11/2 京都府	午前	京都大学にて竹田・安藤両教員によるフィールドスクールに関する趣旨・行程説明.
	滋賀県 午後	守山市コミュニティ防災センターおよび環境センターの視察と両所職員による業務説明, 質疑. 歓迎レセプション. 守山市宮本市長および CSEAS 河野所長の挨拶聴講.
11/3 滋賀県	午前	守山市今浜地区, 三崎地区にて両子供会・自治会と合同植樹活動ならびに交流. 今浜・三崎両地区の集落および営農地域視察.
	午後	美崎地区婦人会提供の郷土料理等で同地区自治会と食事会. 滋賀県立琵琶湖博物館の拝観と琵琶湖環境問題に関する講義(英語)の受講. (琵琶湖博物館専門学芸員中井克樹博士「琵琶湖の生物多様性と外来種対策」)
11/4 京都府	午前	京都府美山町かぶやきの里視察と同地区の現状, 歴史の説明受講. (CSEAS 赤松芳郎博士および普明寺住職)
11/5 福井県	午前	小浜市上根来地区の廃集落視察. 小浜市鯖街道博物館拝観と同商店街視察.
	京都府 午後	宮津市にて天橋立参観(宮津美しさ探検隊森林インストラクター赤松富子氏による案内).
11/6 京都府	午前	天橋立侵食問題と背景説明(CSEAS 赤松芳郎博士)の受講.
	午後	京都市嵐山周辺地域(竹林と角倉了以像等)および金閣寺視察.
11/7 京都府	午前	京都大学にて各参加者レポート作成. 安藤教員によるレポート作成法講義聴講.
	午後	ASAFAS 太田研究科長の歓迎挨拶および研究科に関する説明聴講. 各参加者レポートのグループ別集約および各グループ代表者による発表. 京都大学カンフォアにて送別会.
11/8 京都府	午前	京都市清水寺, 平安神宮拝観.
	午後	商業施設(イオンモール京都)視察.
11/9 大阪府		参加者帰国.

住民らとの交流を通して、彼/彼女らに自国の状況を客観視する機会を提供することになった。なかでも、本学企画・運営者らの研究領域が東南アジアや南アジアの地方都市や農山村での環境管理、開発実践であることから、本邦でも同様の場所・活動領域に属する施設の視察、村興しの実践者などとの交流が企画された。

では実際、研修生らはどんな場所に行き、

何を見聞し、どのような人々と接したのか。表 1 は本フィールドスクールの最終プログラムである。移動の車中での簡単な講義、ごく短時間の施設訪問、一般的な観光などを除き、本スクールの主だった活動は、次の内容からなった。1) 滋賀県守山市の消防署視察とその業務説明の聴講(写真 1)、2) 同市ゴミ処理センターでの同種活動(写真 2)、3) 同市今浜・三崎地区での自治会・子供会との



写真1 守山市内コミュニティ防災センターでの集合写真



写真3 守山市今浜・三崎地区での自治会・子供会との合同植樹



写真2 守山市内環境センターでの講義受講



写真4 安藤教員による集合意見形成法講義

合同植樹（写真3）、4）滋賀県立琵琶湖博物館視察とその環境問題に関する講義の受講、5）過疎化の進行を食い止めるために観光客の誘致など、複数の試みを行なってきた京都府美山町かやぶきの里の視察とその現状に関する説明の聴講、6）かやぶきの里よりも山奥に位置し、林業以外の副業開発も困難だった福井県小浜市上根来地区の廃集落の視察、7）安藤教員による実践型集合意見形成法とそれに基づく各研修生の見聞内容のまとめ、合同報告会である（写真4）。

最後の7）は、安藤教員が地域住民らとの

長年の共働経験から考案した集合意見のとりまとめ法を講義し、かつ実際にそれを研修生に実践させたものである。これを除くと、フィールドスクールの内容・活動は、①本邦地方都市に導入されている環境管理、防災システムの視察、②地域の自然生態系の変化とそれへの地方自治体の対応の学習、③立地条件の差異などから過疎化問題の深刻度と対策の可能性を異にした2つの中山間地域内集落の視察と、大きくはこのような3つに整理できた。

### 研修生のレポートを読んだ報告者の所感

すでに冒頭で示唆したように本プログラムでは各研修生に対し、フィールドスクールを通して見聞・考察したことを、レポートとしてまとめることを義務づけた。ひとり当たりA4で2枚ほどの簡単なものだったが、それらは本学の当初の目的が実際に達せられたのかを判断しうる貴重な資料である。したがって、報告者はこのレポート全てに目を通した。厳密には報告者が見た初稿と、英文校閲や校正を経た掲載稿とは全く同じではないが、各レポートの内容自体は『創発』の掲載号でも確認できる。そこで、ここでは各稿の記載事項に関して個別に言及することはせず、報告者がレポートを読み、それらに対して抱いた全体的な所感について述べることにしたい。

レポート読了後の報告者の所感は、次のような3点に集約可能である。(i) ほぼ全ての研修生がゴミ処理センターや消防署などで見聞した自国にはない先進的な設備、処理・対処方法について感銘を抱き、それらの自国への導入の必要性について言及している。(ii) 研修生の多数が中山間地域内集落の実情とその過疎化問題について一定の理解を示しつつも、自国の現状とのギャップから(i)ほどには同種問題に対して強い関心を抱くには至っていない。(iii) レポートは当然ながら玉石混淆である。

ここでは特に報告者にとって良い意味で印象に残ったレポートについてももう少し言及すると、それらは社会人かその経験者、あるいは卓抜した英作文力の持ち主の作にみられ

た。たとえば、詳しくは『創発』の該当箇所に譲るが、ミャンマーから来た農業技術コンサルタントを兼ねる学生のレポートの記述に、他の一般学生にはない体験に根ざした説得力を、報告者自身は感じた。また、特にブータン人学生のレポートの一部に、ネイティブ並みの英語表現力をみてとれ、小学校から英語で授業が行なわれているという、その教育システムの片鱗を垣間見る思いであった。

### 研修生らの「不可解」な行動とプログラムの意義—むすびにかえて

フィールドスクール前半の守山市での植樹時、ブータンからの学生が頼まれてもいないのに近くの藪から竹を切り出し、それで苗木の廻りに柵を作り始めた。彼らとは地元守山の小学生や中高年の方も一緒に植樹作業にあっていたが、その柵作りが始まってから、特に小学生らは少しフリーズしたような状態になった。小学生たちはブータン人学生がなぜそんなことを始めたのか理解できず、そのふるまいを見ていた。そこで、それをやはり横で見ていた報告者が学生に何をしているのかを尋ね、その答えを通訳して伝えると、中高年の方は即座に笑い声をあげて反応したが、小学生たちは相変わらず彼らを見ていた。その時の学生の答えは、「ウシ除けの柵を作っている」というものだった。

報告者自身は都市部の非農家世帯の出身である。したがって、そもそもウシなど、家畜の飼育経験はない。また、仮に農家に生まれ育ったとしても、報告者の世代だと、「家畜から果樹を守るために柵を作る」と説明され

ても、守山の中老年の方のようにはいかず、おそらくすぐに反応できない者も多い。報告者の少年時代でさえ、各農家が家畜を飼う習慣は、すでに我が国の農村から消えつつあったからである。ただし、報告者はタイやカンボジアの農山村など、自らの調査地で同種の柵を何度も目にしているので、ブータン人学生の所作の意味をさほど時間を置かずに理解した。だが、その時は守山の小学生たちとは、また別の意味でフリーズ状態になった。辺りを少しでも見廻してみれば、ウシはもとより、もっと小型の家畜でさえその周辺には見当たらず、そのような柵など不要である。その程度の観察力や想像力さえ、彼らはもたないのかと、少し呆れたからである。

ただ同時に、その時はそう思ったが、いま本稿を書きながらこれまでの自らの現地フィールド体験などを振り返ってみれば、報告者自身はもっと粗忽なふるまい、たぶん現地の人たちにとっては「不可解」にも思えたはずの行為を、いくつも重ねてきた。たとえば、すでに20年前になるが、報告者は東北タイの社寺林利用・管理を研究テーマとし、ある森の寺に寝泊まりしながら数ヶ月間を過ごしたことがあった。「クティ」と呼ばれる、僧侶が使う森の中の小屋に止住するよう住職に指示され、そこで寝起きしつつ調査を始めたが、その数日後、小屋が樹々に覆われ日中でも暗いので、廻りの樹木を間引いて、小屋を明るくしてしまったことがあった。幸いなことに住職は温厚な方だったので、怒られるようなことはなかったが、その間引きの跡を見た彼の呆れ顔を、報告者はいまでも忘れな

い。森の寺では僧侶が瞑想しやすいようにクティの廻りに、わざわざ樹木を密に生い茂らせ、光環境を瞑想向きに調整していたのに、報告者がそれを「きれいに」刈り込み、僧侶らの感覚からすれば、クティの環境を「改悪」してしまったからである。

この件はいまも報告者がよく記憶している例だが、ほかにも特に院生時代は同種の粗忽あるいは「不可解」なふるまいをいろいろと重ねていたはずである。ただし、これは自らの希望的な観測も含め、追記しておけば、同様の行為を犯す頻度は、おそらくフィールド体験を重ねるたびに減っていったのではないかと思う。なぜなら、いまから思えば上述の住職の反応も一種の触媒だったように、フィールドで出会う人々のリアクションや表情などから、異なる文化や社会の中で自らの行為がどのように見えるか、自然と意識するようになり、自身の行為を少しだけ事前検閲するようになったからである。

話を振り出しに戻すと、上記のブータン人学生2人が本フィールドスクールの期間中に、植樹活動時のふるまいのズレを実際に自覚するようになっていたかは、定かではない。しかし、やはりこれも報告者の希望も込めて書けば、彼らも小学生たちや私のリアクションから「あれ、俺たちのやってること、何か変かな？」と、感じ取った可能性もあるのではないか。彼らが普通のコミュニケーション能力の持ち主なら、たぶんそんな風に感じた時、報告者自身は想像する。

報告者がたまたま目にしたのは、ブータン人学生2人の上述の行為だったが、ほかに

も何人かの研修生が形こそ違え、何らかの異文化・異社会体験を今回したのではないか。仮にそうだとすると、ではそれに何の意義があるのかと問われても、「これこれこうだ」と、即答できるような意味づけを報告者自身、現時点ではできている訳ではない。だが一方で、おそらくひとついえるようなのは、普通の観光ツアーはもとより、短期留学でもできない体験を、今回のフィールドスクール

は彼/彼女らに提供できたのではないか。そして、そのことを通して、異文化・異社会をみる視野なり、想像力なりを彼/彼女らに拡大させ得る機会を、本プログラムが確実に提供できたのではないかという点である。もし本当にそうだとしたら、今回のフィールドスクール・プログラムはうまくいったといえるのではないかと、自画自賛になるかもしれないが、報告者自身はそのように考えている。

---

## 「山下財宝」にとり憑かれる人々

師 田 史 子\*

### 「地図はないのか」

この質問を、幾度投げかけられたであろうか。調査地選定のためにフィリピン・ミンダナオ島の農村を訪問し、私が怪しい奴ではないと判断してもらえるほどに人々と打ち解けたころ、必ずと言ってよいほどにこの質問が誰からともなく放たれた。「ない。おじいちゃんに聞いてもおばあちゃんに聞いてもないって言っていた」と即答する。ない、とだけ返答すれば、矢継ぎ早に「日本に帰ったら家の中を探してみろ」「祖父・祖母に聞いてみる」と返ってくることは火を見るよりも明らかであるので、会話の展開を先取りしてやりすごすことが、この類の話に嫌気がさして

いた私の癖になっていた。

人々が求めている地図とは、山下財宝のありかをしめす地図である。フィリピンでは「ヤマシタ・トレジャー」と呼ばれるこの財宝は、第二次世界大戦終戦時に山下奉文大將率いる日本軍によって埋められたとされる莫大な埋蔵金全般を指す。財宝なんて埋まっているわけがない、なぜこのような話を真に受けているのか。これが、山下財宝に対する私の第一印象であった。しかし、ミンダナオ島の村々では、外来者にとってははにわか信じがたい財宝を、実に多くの人々が真剣に掘り当てようとしていた。なぜだろうか。

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科